

次の文章を読んで後の問いに答えなさい（なお問題の都合上、一部表記を改めている）。

森次郎は、両親の都会で貧しい叔母の家で暮らさねばならず、そこでの生活は彼にとって楽なものではない。ある日親友の石田は元気がない次郎を見て家に誘う。

石田の家では、祖父の死後、彼の希望で、通学に便利のように、狩野川べりに別宅をもうけて、女学生や小学校の上級生の妹たちといっしょに住まわせていた。両親も週の半分をともに暮らしていた。裏庭から石段で狩野川へ降りられるような位置で、町なかとは思えないほど静かな場所である。時に石田の部屋は、川の好きな彼の希望で、川に向かった二階であるが、ここに移って間もない頃には、その部屋の縁側から釣りざおを出して川魚がつかれると、自慢していたが、後にはボートに熱中して、裏の川岸にボートをつないであつて、学校の帰りにボートへ誘ったこともある。四年生になると、春休みに東京の叔母の家で聞いた蓄音機に夢中になって、話題がボートから音楽に変わった。

実は、次郎は自慢の蓄音機もまだ聞いたことがなく、彼が目を輝かせて語るピアノやバイオリンが、どんな音を出すのかも知らなかった。いい音盤が届いたというのが、何のことかわからないで、石田について行った。

石田の二階に通されて、次郎は体を横にする場所のない自分にひきくらべて、宮殿のように広い本宅の他に、こんな清潔な別宅を持つ彼が、どんなにしあわせかと、窓側^{*}の尺余^{*}の濡れ縁に腰かけて、つくづく外を見た。

¹「部屋から空が見えるんだね。ああ、大きく良ができる——」

²「空はどこからだつて見えるよ。狩野川がよく見えるだろう？　狩野川を見るにはここが一番いいと、ひそかに自負しているんだがね。川つて、いつ見ても、飽きないよ。僕は大きくなったら、狩野川が僕に語ったことという題で、詩か音楽を書きたいな。でも、川は洪水の時が一番壮大で、遅しくて、好きだな。³去年の夏休みの洪水の時は毎日、朝からここを動かないで眺めあかして、感動したな」

「あの時、僕の村は大半水に浸かった、床上に水の上がった家が多かった。僕の家も床上まで水に浸かつて困った。舟を流された漁師もあつて大変だった——」

「あの時、川口や下流は凄まじかつたらう？　見に行きたかったが、お成橋も危険だったし、吉田方面も水に浸かつて、川口の方へ行けなかった——あとで、千本浜⁴からまわれればいいとわかったが、三日もたつていたからやめたけれど——」

「千本へ出ればよかったよ。駿河湾⁵が泥の海になっていたからね」

「僕が興味があるのは川だけなものな。川の語ることにしか興味がないんだ。川の語ることという表現は、君の言葉をもらったんだが——」

その間に、^{*}老婢がおやつを運んだ。次郎は①を見張った。初めて見るものだった。白い湯のみのようで、小さな取っ手のついた茶碗に、黒い液体がはいっていた。

「砂糖をたくさんいれないとうまくないんだ」

石田のするように真似てのんだが、その黒い汁は、熱くて、あまにがいばかりで、空腹でなければ、喉を通らなかつたらう。

「なんというもの？　これ——」

⁴「コーヒーだ」

「これがうまい？　君は」

「うまかないけれど、なれるとうまくなるそうだよ。父には内証⁶だけれど、春休みに東京へ行つた時、坪内⁷さんの劇団に關係している叔父——そら、祖父の秘密にしていた叔父にすすめられたんだ。東京では学生がみんな飲んでるんだよ」

「ああ、これがコーヒーだね」

「うん、コーヒーさ。香りはすてきだろう」

「そうか、これがコーヒーか」と、茶碗にのこった黒い汁を、感にたえないように眺めた。

「ブラジルでできる大豆だつて、聞いていたけれど——」

「大豆をつぶして、味噌汁をつくるように、コーヒーの豆をつぶして、西洋人はコーヒーをつくつて毎朝のむんだよ。

舶来品で高いんだ」

「僕の村から移住した人々は、みんなコーヒーを作つていて聞いたが……そうか、これがそのコーヒーか」

石田はそれには興味なさそうに立ち上がり、床の間にどっかり置いた大きな飾箱のような塗りものの蓋をあけた。かつて次郎の私生活や漁村の生活に興味をもつて、根掘り葉掘り質問した石田が、祖父の死後、趣味が変わつて、貴族趣味なのか、都会的なものをよしとして、地方的なことを貧乏臭いといい、土俗的だ、野暮だ、醜惡だといって、努めて避ける。次郎は自分の醜惡な過去や現在を、すっかり彼に売りわたしてしまつたようで、彼との友情の将来に関して、それをひそかに憂えていたから、この時も、⁵あわてて話題をその飾箱の方へ移した。

飾箱だと思つたものは舶来の蓄音機だという。ラップがなくて、どこから音が聞こえるのだろうか。石田は得意な表情で、戸棚から犬のマークのある大きな盤を取り出して、勿体ぶつてかけて蓋をした。

全く不思議な手品のように、飾箱全体から、奇妙な美しい音が流れ出した。この世のものと思えない音だ。石田も腕ぐみしてじつと聴き入っているが、次郎は目を閉じた。これは一体なんであろうか、心に滲み入るようで、聴いているうちに、空腹な胃袋も、熱っぽくてだるい肉体も、だんだんなくなって、自分というものが、地上から誘い出されて、宙を翔けまわりながら、豪華な楽園を愉しく探しまわっている。この宙をかけまわるものが魂⁸というのであろうか——突然音がとまつて、目を開けたが、宙をとびまわっていた魂が、肉体にかえる暇⁹がなかつたのか、口をきくこともできなかった。

石田はゆつくり立ち上がり、盤を裏返した。再び次郎は目を閉じた。

これが、音楽といえるものを聞いた最初である。全部聴きおわつた時、次郎の目には涙がたまっていた。その涙に、石田も気がついて、これだから森は親友としてすてられないと、ひそかに自ら誇つた。

「これはなんだ、僕は自分に足があつて、地上にいない必要ならなことが、悲しくなつたくらいだ」

そう次郎はてれくさそうに涙を説明した。

「ピアノだよ」

「ピアノつて、こんなに素晴らしいものか」

「ピアノが素晴らしいんじゃないよ。この曲と演奏者が素晴らしいんだ。ベートーヴェンのムーンライト・ソナタだ」

「ムーンライト・ソナタ、英語^{*}のリーダアにあつた、あれか。あの月光の曲つて、これだったか、そうか。つまらないお話で、難しい単語が多くて閉⁶したけれどさ、英語の時間に、これを聞かせてくれれば、あの盲目の少女の

感動もわかつたし、ベートーヴェンの偉さもわかつて、面白かつたらうに、そうか、これが、あの月光の曲か。でも、ピアノつて凄⁷い音だなあ」

「もう一度かけようね」

次郎の目には再び涙がたまつた。しかし今度は、彼の魂は肉体にとどまつて宙を翔けまわらなかつた。彼のおかれた醜惡な環境の外をぐるぐるまわつて、客觀的に眺めさせたと言うべきか——

こんなに素晴らしく美しいものが、自分の手の届くところにあるのに、そうとは知らずに、家庭だとか、新しい叔母だとか、信仰がどうだとか、病気のために中学校をやめるのが神の意思かどうかとか、まるで醜惡な泥海に③をとられて、じたばたしていた。なんという愚かなことだろう。石田の祖父が二年前に忠告した「親の信仰にとらわれてはならない、大きく物を見るように」というのは、このことだつたらう。同じことを石田は音楽を聴かせることで、忠告するのだろう。石田を批判的に見たこともあるが、⁷やはりなくてはならない親友だ。

「ありがとう、石田」

次郎は複雑な想いをこめて、そういつたが、石田は、

「他にも盤があるけれど、ムーンライトの感動がにごるといけないから、この次に聞かせるよ、ね」と、言いながら、二度同じ盤をかけた。

（戸沢光治良『人間の運命』より）

* 尺余……一尺（約三〇センチ）よりやや長いこと。

- * 濡れ縁：両戸の外側に付けられた縁側。
- * 老婢：年取った女中。
- * リーダア：（英語の）教科書。

問 1 ① ③ に入る言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア □ イ 腹^{はら} ウ 目 エ 足 オ 腕 カ 耳

問 2 —線 1「部屋から空が見えるんだね。ああ、大きく息ができる——」とあるが、ここからということが読み取れるか。次の中から当てはまるものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 次郎は贅^{ぜい}沢な生活を当然と考えている石田の傲慢^{ごうまん}さに気がついたということ。

イ 次郎は居心地の悪い家庭環境から解放された気持ちになっているということ。

ウ 次郎は詩や音楽を楽しむことができそうな環境に心躍^{こころはな}らせているということ。

エ 次郎は石田の友人としてふさわしい自分を演出しようとしているということ。

オ 次郎は石田の生活を知ることと自分との落差に思いをはせているということ。

カ 次郎は裕福な石田に対する激^{げき}しい憎悪^{そうお}をおさえこもうとしているということ。

問 3 —線 2「空はどこからだつて見えるよ」とあるが、ここからということが読み取れるか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ふたりだけの楽しい時間なのに貧乏臭い会話しかできない次郎にいらだつ石田の様子。

イ 感受性の豊かな次郎に対抗^{たいかう}して、財力を見せつけ優位^{ゆうゐ}に立とうとしている石田の様子。

ウ 次郎と自分の間にある生活環境の大きな格差を問題とせずに会話を続ける石田の様子。

エ あたりまえのことを答えなければわからない次郎を冷たく突き放している石田の様子。

オ 次郎の置かれた環境を理解できず、貧しさを馬鹿にして傷つけようとする石田の様子。

問 4 —線 3「去年の夏休みの洪水」とあるが、石田と次郎はその「洪水」をそれぞれどのようなものであるとらえているか。当てはまるものを一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 芸術的な鑑賞^{かんしょう}の対象

イ 嫌悪^{けんお}すべき貧しさの象徴^{しやうてい}

ウ ふたりの絆^{きずな}を深めた出来事

エ 日常生活をおびやかすもの

オ 地域^{ちいき}の一員になるための試験

カ 社会貢献^{こくけん}に目覚めるきっかけ

問 5 —線 4「コピー」とあるが、石田と次郎の「コピー」に対するとらえ方を次のように説明した。

A と B が反対の意味になるように、漢字二字の言葉をそれぞれ考えて答えなさい。

石田：コピーを、A 者の立場から、流行の先端^{せんぽん}にある商品として見ている。

次郎：コピーを通して、ブラジルに移住した同じ村出身のB 者を見ている。

問 6 —線 5「あわてて話題をその飾箱の方へ移した」とあるが、ここから次郎のどういう様子が読み取れるか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 貧しさを嫌^{きら}うようになった石田に、自分の家や村のことばかり話していることに気づき、見捨^{みすて}てられぬよう話題を合わせようとしている。

イ 個人的な情報をすべて石田に握^{にぎ}られているので、その情報をどう利用されるか不安になり、彼の様子を見ながら真意^{まごころ}を探らうとしている。

ウ 自分の村の苦しい状況^{じきょう}を救ってもらうため石田に取り入ろうとしていたが、その狙^めいに気づかれたのではないかと焦^こり、取り繕^{つくろ}っている。

エ 自分が提示した話題に相手に乗ってこない事実^{じじつ}にいら立ち、どうしたら石田に友人として認^{たの}めてもらえるのかを必死^{ひし}になって考えている。

オ 自分の発言がこの家では価値^{かち}を持たぬことに気づかされ、石田の意に沿^{したが}う言動のみが許されているという現実を受け入れようとしている。

問 7 —線 6「これだから森は親友としてすてられないと、ひそかに自ら誇った」とあるが、ここから石田のどのような思いが読み取れるか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 次郎の貧しさを知り驚く一方で、人の好意を素直に受け入れて卑屈^{ひくつ}にならない彼の賢さ、誇り高さに、打ちのめされるほど感動している。

イ 感受性が豊かな次郎を、貧しさや複雑な家庭環境にまどわされることなく友人として選^えび、自宅に招いて親しくしている自分に満足している。

ウ 優秀^{ゆうしゆう}な次郎に対してひそかに引け目を感じていたが、音盤くらいで泣いてしまうという弱点を自分だけが知ることになり、優越^{ゆうえつ}感にひたっている。

エ 音楽に対して知ったかぶりをし、さらに涙を流す演技をしてまで自分に近づこうとする次郎の計算高^{けいさんこう}さを見抜き、勝ち誇った気持ちになっている。

オ 贅^{ぜい}沢な生活を送る自分にとって、見せるもの全てを珍^{めづ}しように喜び涙まで流す次郎の反応が、やはり退屈^{たいくつ}しのにうつつでついであつたと得意になっている。

問 8 —線 7「やはりなくてはならない親友だ」とあるが、次郎は石田をどのようにとらえていると考えられるか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 石田の人を軽視^{けいし}する態度は気になるが、彼に負けるものかという反骨^{はんこつ}精神を引き起こし、自分を高めてくれる存在^{そんざい}であるということ。

イ 石田は無神経な発言で自分を傷つけることもあるが、それ以上に人の温かさや家族のあるべき姿^{すがた}を教えてくれる存在であるということ。

ウ 石田の言動に劣等^{りやうとう}感を抱かされることもあるが、現在の境遇^{きんぐう}を思い悩んでいる自分に、異なる世界を提示してくれる存在であるということ。

エ 石田は自分のことをひそかに馬鹿にしているが、これまでの苦労や辛^{つら}さを理解し受け止め、アドバイスまで与えてくれる、父親代わりの存在でもあるということ。

オ 石田は金持ちであること自体が嫌味^{きらみ}だが、自分の知らない音楽や食べ物を教えてくれ、今後も貧しさを理解し援助^{えんすけ}し続けてくれるであろう存在であるということ。

二次の文章を読んで後の問いに答えなさい。ただし解答の字数については、句読点等の記号も一字として数える（なお問題の都合上、一部表記を改めている）。

I 地図のある登山では先のことが予想でき、余裕をもてる。それがどういふことかといえは、たとえ河岸がつるつるに磨きぬかれた険悪なゴルジュがあらわれても、地図を見てその先で地形がゆるくなっていることがわかれば、あと一時間頂張ればこの険悪なゴルジュを突破できるぞ、などと予測でき、具体的未来を想定できるということだ。（中略）

ところが地図を捨てた途端、この行動の構造は根底から、完璧にくつがえされる。

午後三時に当該ゴルジュにつく。しかし地図がないので、行動の判断材料となるのは、目の前にあらわれたゴルジュそれ自体しかない。一見したところ険悪で、流れは三十メートル先で屈曲しており、その先がどうなっているか不明だが、もしかしたら一キロくらい続いていることも考えられる。いや一キロかもしれない。いやいや、もしかしたら頂上付近までつづいているのか？ と、このように地図がないと、ゴルジュがどこまでつづくのかは絶対にわからない。

II 地図のある／なし問題における決定的分岐点は、未来予測を得られるかどうかという点にかかっている。未来予測とは時間そのものだ。地図を見て未来予測を得られるとき、登山者はその未来の時点におけるおのれの姿をリアリティーをもって想像することができる。この場合の〈おのれの姿〉とは〈生存している自分〉と換言してもいいだろう。ゴルジュを突破すれば、その先の二股で幕営できそうだ。さらに地図を見るかぎり、幕営地の先に悪場はなく、おそくとも明後日昼には山頂につくだろうし、天気予報を見ても明日から高気圧におおわれ数日間は快晴がつづくらしい。山頂から登山道を下りれば下界なので、もう死ぬことはなさそうだ……と、このように未来予測が具体的かつ詳細になればなるほど、予測できた時点までの自分の生存を想像でき、それが、あーよかった、これで大丈夫、安心だ、という現時点における心の平安につながる。未来が見えると生物学的な意味での生が担保された気になり、安心できるのである。

そして、このときの時間の流れを分析すると、未来が予測できることによつて現在におけるおのれの心理が安定しているわけだから、未来が起点になつて現在がそれにしたがうというかたちになつている。図を描けば、未来の一点から矢印が現在にむかつてのびているものとなるだろう。未来を支点にぶらーん、ぶらーんと現在がぶら下がっている、そのような状態である。未来における支点が強固であればあるほど、つまり未来がはっきり見えれば見えるほど、そこにぶら下がる現在も安心安全となる。

III たしかに地図をもつことはいかに人間の動物的な行動原理にかなうことであり、その意味で本質的に重要なこと、良いこと、モラルにかなつたことであり善である。さらに地図におけるこの未来予測機能を吟味してみると、これが現代人の生活をつらぬく時間のリズムと共通していることもわかる。

登山にかぎらずわれわれは日常生活においても未来予測を欲しがり、現在という時間を安定させようとする。手帳にこまごまと予定を書きこみ、定められた予定をこなすことで現在という時間を生きている。老後の不安を少しでも減らすために散財はやめて、こつこつと銀行口座に貯蓄し、がん保険に入り、学資ローンをくむ。モノを買うときや外で食事をするときはスマホでレビューを見て、なるべく選択に失敗がないように保険をかけておく。簡単にいえば、可能なかぎり未知を消去し、あらゆるリスクを避けようとして、安心安全をはかろうとする。こうした行動の根底のすべてには、究極的には生き物の本能としての未知への不安、すなわち死の恐怖がある。

IV しかし、私は思うのだが、すべての行動を予定調和で終えてしまうと、そこからはどうしても生のダイナミズムがうしなわれてしまう。現在というのは元来、渾沌としたもので、その渾沌に直面し、判断、対処することで人間は生きている実感を得ていたであらうに、現代のわれわれはあまりにもこの現在の渾沌をふうじこめようとしすぎている。（中略）

未来により現在が決められるのではなく、その逆に現在によつて未来がつくられていく。今現在の私の知覚、感応、直観、判断、行動の結果によつてそれぞれ別の未来ができあがっていく。そこには登山や冒険でなければ経験できない生のダイナミズムがあつた。いや、登山や冒険などというちいさな話ではなく、人間はそもそもそのような未来の見え

ない自由の中で生きていたはずであり、今も本当はそうなのである。

（角幡唯介「裸の大地」より）

- * ゴルジュ…大きな崖壁に挟まれた深い谷。
- * 当該…この文章では「それにあたる」という意味。
- * 幕営…テントを張つて野宿すること。
- * 予定調和…予定した流れにしたがつて事態を動かすこと。
- * ダイナミズム…力強さ。
- * 渾沌…秩序やきまりのない状態のこと。

問 1 ――線 1 「地図のある登山」が安心だといえる理由を次のように説明した。**I**・**II** の内容をふまえて、解答らんに指定された字数で言葉を入れなさい。ただし、**A** は本文中から抜き出すこと。また、**B** では「保証」という言葉を必ず用いて、その使用した部分を□で囲みなさい。

地図があることで **A・十字以内** ため、**B・十字以内** ように感じられるから。

問 2 ――線 2 「未来の見えない自由」とあるが、「未来の見えない」状況がなぜ「自由」といえるのか。その理由を次のように説明した。本文全体をふまえて、解答らんに指定された字数で言葉を入れなさい。ただし、**A** では「合わせて」、**B** では「選択」という言葉を必ず用いて、その使用した部分を□で囲みなさい。

「未来の見える」状況では **A・二十字以内** ことになつてしまつて、**B・二十字以内** 「未来の見えない」状況では

問 3 本文全体をふまえると、筆者は「地図のある登山」と「地図のない登山」のどちらを好ましくとらえていると考えられるか。どちらかを選び、記号で答えなさい。さらにその理由を、次の形式に当てはまるように指定された字数で言葉を入れて答えなさい。ただし、**A** では「判断材料」という言葉を必ず用いて、その使用した部分を□で囲みなさい。

筆者は（**A** 地図のある登山／**イ** 地図のない登山）を好ましいものとしてとらえている。

なぜなら、**A・二十字以内** ことで、**B・十五字以内** から。

二 次の問いに答えなさい。

問 1 次の 1 ～ 7 の慣用句・ことわざについて、後の問いに答えなさい。

(慣用句・ことわざ)		(意味)
1	A の額	場所の狭いこと
2	取らぬ B の【①】算用	手に入るかどうかわからないものを当てにして計画を立てること
3	C と B の化かし合い	わるがしこい者どうしが互いにだまし合うこと
4	D の甲より年の【②】	長年かけて積んできた経験は貴重であり、価値があるということ
5	E を F に乗り換える	劣ったものを捨て、すぐれたものに乗り換えること
6	F の耳に念仏	いくら意見をしても全く効き目のないこと
7	G の威を借る C	強い者の威力を用いていばる人のこと

- (1)

A

、

G

に入る語をそれぞれ考え、どこにも用いられない二つの語を、記号(ア、コ)で答えなさい。ただし、アイウエオ順で答えること。
- | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ア | 犬 | イ | 猫 | ウ | 牛 | エ | 馬 | オ | 蛙 |
| カ | 亀 | キ | 狐 | ク | 虎 | ケ | 狸 | コ | 猿 |
- (2) ー線「額」の読み方をひらがなで答えなさい。
- (3) 【①】、【②】に入る漢字一字をそれぞれ答えなさい。

- 問 2 次の①～⑤の文中にあるー線のカタカナを漢字に直しなさい。ただし、送りながが含まれるものは送りなをひらがなで答えること。
- ① トウイツ感のあるデザインを考える。
- ② 大学生になり村上先生の心理学のコウギを聞くことができた。
- ③ 大学卒業後、作家をココロザスようになった。
- ④ 犬をカウためには広い庭が必要である。
- ⑤ 子どもたちがイキオイよく走っていった。

(以下余白)